美を求める

美を求める心

岡部伊都子

美を求める心　NDC 914　19.4 cm
定価　三八〇円
昭和42年11月11日　第1刷発行

著者　岡部伊都子
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目十二番二十一
電話　東京　五九五二一二二一（大代表）
振替口座　東京三九一三〇

印刷所　暁印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂

★落丁本・乱丁本はおとりかえします

© ITSUKO OKABE 1967　PRINTED IN JAPAN

美を求める心　目次

I 美のあるところ

青い林道 11
青磁 13
うるし刷毛 15
正倉院の工具 17
一体展 20
ほんもの、にせもの 23
のこり香 25
非礼 26
腹ほげ地蔵 29
黒髪 30
散り花びら 32
虹と青麦 35
流しびな 38
ヴェトナムの籠 40

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

月の篠山 43
であい 47
美しい空間 50
炎 53

II 女ひとり

水色綸子の娘は 59
努力の日 64
なま身を恋う 66
飛ぶ夢 69
その背中 74
池の世界 77
あしかがよぶ 80
黒いすすき 82
灼けつく盃 84
椅子 86

ザークの孤独 89
空地の壁 92
鷺の群 95
灯のともる 98
おうな 101
霊あらば 103
拒否 106
渦 109
距離 112
立ちどまる 115
夢の女性 117

III 暮らしのなかで

お盆 125
夢見ごはん 128
ぬた 131

私の壺 132
私の月見草 134
膝のくじゃく 136
縞木綿 138
飾りの玉 141
紅タウル 142
年賀状 145
雛の皿 148
小さな扇 150
ふたつの茶碗 151
かんばしい土 154
化粧甲斐 157
女扇 158
スラックス 160
ろうそく 162
男ぶろしき 164
とっさの雑巾 166

靴 167
自由な鯉のぼり 171

IV おりおりの……

若葉雨 179
哀愁 182
悲しきおふとん 183
原爆の資料 184
勇気ある拒否 186
若さ 188
存在 190
感覚これ浄土 192
輝く晩年 193
カラー料理写真 195
こわい 197
蟻 200

注意 203
小さな靴 205
祝福をともに 207
片目だるま 208
出ない数字 209
母と子 211
思惟 213
なつかしい人 215
個性的 216
波紋 217
まじめに 220
悪魔にさえも 221
無名の力 222
輝く魂 226
幸福のことば 228
あとがき 235

装丁＝稲垣行一郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

美のあるところ

青い林道

なかなか、美しい道といえる道は少ない。

いちど通った道で、もう一度、ぜひに通ってみたいと思う道も、はなはだ少ない。

道らしい道は……急速に私たちの前から姿を消しつつある。

とくに人間の歩くのに親切な道はなくなってゆく。山坂をどんどん切りひらいて、坦々となだらかなハイウェイがつくられている。突風のように走り通るくるまのための道は、つぎつぎと心をこめてつくられているようだけれど、人間が安心して歩ける道のことなんて、だれもあまり考えないらしい。

お互い、二本の脚をもって歩く人間同士でありながら、なぜ人間の足の道を大切にしないのか、ふしぎでたまらない。どんなに便利なものが発明されようと、人間にとっては自分に備わっている手足ほど大切なものはないのだし、人間存在にぴったりの自然ほど、ありがたいものはない。

比叡山の奥、坂本から七キロばかりはいった横川は、元三大師の廟や、『往生要集』を著した源信僧都の住まいだった恵心院、高浜虚子ゆかりの横川中堂のあとなどが、しずかに散在してい

る。多くの名僧智識が修行し、その魂を練ったところだけあって、静寂のうちにも烈々とした気魄の感じられる、清澄の境である。

お天気のよい日でも、小暗い杉の木立の間を、細い林道がすうっと通っている。この杉木立のほのしたたるような青さは、その下を歩く人の心を染める。あたりの植物たちは、青の空気のなかに、さらにうすく、あるいは濃く、あざやかな緑の葉をのばして、端然と存在している。見る人があろうとなかろうと、そのもの自身の存在に徹して、真剣に咲きすごんでいるありさまは美しい。

黙々と生きる木々の姿は、私の策略、私の卑劣、私の傲慢をはっきり浮きたたせ、痛烈にこちらを批判する。しいんとした、あたりの木々は、私の歩くのにつれて、いっせいに私を批判し、眺めている。その声なきひしめきが、ひしひしとこたえてきて、とても、さびしいどころのさわぎではない。

この、青い草木たちによって、かもしだされている空気の、なんというおいしさ、純粋さだったろう。もし、ここの空気をパイプで水道のように送れるものなら、スモッグになやむ大都会の人びとに、こんこんと送ってあげたかった。

だが、このあたりの空気も、いまはすっかり青の密度がちがってしまったことであろう。すぐそばを、ドライヴウェイが通り、簡単に横川にくるまが横づけできるようになってしまったのだ。

激しい自然の気魄にみちた、細い林道、濃い醇良の空気、横川への歩く道は、まさしく人間が

歩いて、心を歩かせることのできる貴重な道のひとつだったのに……。近代化を否むわけではさらさらないが、人間に対して親切な道を失うことを、近代文明だとおしつけられるのはかなわない。なまの足を忘れて、健全な進歩はないであろうに。

青　磁

のぞきこめば、鉢の中に宇宙がある。

その中に、小さな自分の姿が、うごめいている。

いつのまに、青磁のとりことなったのであろう。私は少女のころから、高雅な紫の使徒として、紫の衣につつまれ、紫の翳を愛し、紫の言葉を語りたいと願っていた時期が長かった。紫の世界に心酔していた。

しかし、うす紫の呼吸を吸って、なんだかうっとり夢をみているような、世間しらずの少女は、その世間しらずさを徹底的にたたきのめされた。それは、わが身ながら小気味のいい、思いきった破れであった。

無智は、純真などと、言葉をおきかえて安心するわけにはゆかない。ひとつの怠惰である。世

間知らずの方が美しいのだと、逃げているのは卑怯であった。認識と体験を超えて純真であって、はじめて純真なのだし、世俗に傷つけられてなお美しいのが、ほんとうに美しいことなのであった。

紫の破れを自覚して、自分のなかの紫の部分を憎みはじめたところから、私は新しい色を身につけるようになったのではなかったか。

ぶどういろ、あずきいろ、しんじゅいろ、とくさいろ、みずあさぎ、カナリヤいろ……。

微妙な色の行脚であった。

身体でとらえる色と、心でとらえる色と、視覚のとらえる色とが、なかなか、ぴたりと一致するものではない。色のあるものを着なくてはならぬ約束が、なんとわずらわしく思われることだろう、光りとしての白、闇としての黒。

わずかに、どこまでも虚空であるはずの空が示す、そらいろが心にかなった。この数年は、一年を通じて、そらのいろに私はまとわれてすごしてきた。

そしてある日、白鶴美術館のひそやかな空気のなかで、大ぶりの青磁の水指に出あった。明時代の作品で、それは平明な、豊醇な形のゆえの気品があった。青磁の色の深さ、そして淡さ。ひと刷毛の青を、いくたびもいくたびも重ねて塗ったような、不透明の底しずもり。そのくせ、内部から光りが輝きでてくるような、清い深さ。奇をてらわない端雅な美しさに思わず立ちどまらずにはいられないみごとな鉢だ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com